

『暗夜行路』にみられる程度副詞の語彙と
その意味組織と各語の用法 (2)

——そのさまの程度を示すもの——

井 上 博 嗣

はじめに

本稿は前稿の——比較的程度のもの——に続くもので、対象とするヒト・モノ・コトのありさまの現実の程度をそれとして量る語彙についてそれに属する語を示し、その意味・用法を考察するものである。対象をそのものとして量ると云ってもそのもの一般のありさまやもっと広い一般のありさまとの比較は常にある⁽¹⁾。

資料とした作品は前稿と同一のものでその全用例を扱っている。語彙と意味組織を結論として述べると次のようになる。

(1) 度外的極度であることを示すもの

あまりに・あまり・あんまり

(2) 極度であることを示すもの

極端に

(3) 度外的高度であることを示すもの

如何に

(4) 高度であることを示すもの

大変・非常に・ひどく・随分・随分に・とても・至極・甚だ・恐しく・かう・これ程・これ程に・これ程にも・こんな・こんなに・こんなにも・それ程に・それ程・そんなに・そんな・そんなにも・あれ程に・あれ程・あれ程にも・あんなに・ああ・さも

(5) 相当度であることを示すもの

相当・大分・いい位に・或る程度には・割りに

(6) 低度であることを示すもの

一寸・ちっと・ちっとばかり・少しは・少しも・少しでも・いささか・幾分・比較的

以下、以上の各語についてその意味用法を考察する。

(1) 度外的極度であることを示すもの

一 「あまりに」について

「余りに」と表記されて四十例みられる。

① 形容詞を修飾する場合 六例

- それを其男に使はれてゐる或る男が余りにひどいと云ふので、
(四八頁上段九)
- 然し今話してゐる事は、或ひは話してゐる心持は、余りに浅く、余りに平面過ぎると思つた。
(二七頁下段一)

- 主人公は其女が余りに子供らしく無邪気なために誰からも疑はれないのを……
(二二頁上段四)

以上、いずれも「余りに」は、「ひどい・浅く・子供らしく」と云つた形容詞で示されるコト・モノ・ヒトの現実のありさま(状態)の程度が「あまりにひどすぎる・浅すぎる・子供らしすぎる」と云つた度を越しての極度であることを意味している。度を越しては度の外である。次例も同類例である。

- 余りに材料が少なく(二二〇頁上段一八)・余りに自分らしい(一四四頁上段二)・余りに彼らしい(一四四頁上段三)

② 形容動詞を修飾する場合 十三例

- 若しも君の方でどうしても呉れないと云ふ事なればそれ迄の話だが、僕にそれを同意させようと云ふのは

君の方が余りに勝手だと、以てのほかの見幕でした。

(三五頁上段六)

右例で「余りに」は、形容動詞「勝手だ」を修飾して、その現実のありさま(勝手だ)の程度が度を越したものであることを意味している。

次例も全て同類例である。

・余りに安価な感じ(六〇頁下段一二)・余りに明らさまな(九頁上段一九)・余りに半端だった(二〇〇頁下段一二)・余りに惨酷な(一二〇頁下段二三)・余りに無能な(一三二上段八)・余りに虚心な(一五六頁上段九)・余りに上手に(二六九頁上段三)・余りに幸福だった(二七四頁下段一九)・余りに直接に(二四〇頁上段六)・余りに空想的である(二六〇頁上段一〇)

次の二例もその意味からして、この類例に数えられよう。

・単刀直入に書いて了へば、一番簡単だったが、余りにそれは寝耳に水に違ひなかった。

(八七頁下段一五)

・今帰れば余りに元の李阿弥に思えた。

(七八頁上段四)

「余りに」が形容詞・形容動詞で示されるありさまの程度が度外的極度であることを示す例は以上の十九例である。それらと同様のヒト・モノ・コトのありさま(状態)の程度が度外的極度であることを示す例が他に十三例みられる。類例の多いものから挙げる。

③主語＋形容詞・形容動詞の語幹や名詞や動詞の連用形に「過ぎる」がつく諸語を修飾する場合 六例

・「する事が余りに良心がなさ過ぎる」

(三四頁上段一四)

右例で「余りに」は、「良心がなさ過ぎる」と云う主語＋形容語幹(な)＋名詞をつくる接尾語(さ)に「過ぎる」がついた語句を修飾していて、その状態の程度が既に「過ぎる(ている)」で示されている度外的であるありさまが極度であることを意味している。度外的極度の意味を示す「余りに」の基本的表現形式である。

次の諸例も同類例である。

・余りに明^るかる過ぎる(一三三頁下段二)・余りにそれがお米になさ過ぎる(一四七頁下段一〇)・余りに氣^が早過ぎる(二三六頁上段一八)・余りに見^かかけが好人物すぎた(一一六頁下段五)・余りに云^ひ過ぎた事を(一四頁上段二三)

「好人物すぎた」は「好人物すぎていた」、「云ひ過ぎた」も「云ひ過ぎていた」で、「過ぎていた」の程度が度外的極度である。

④動詞＋「ている(ていた)」を修飾する場合 五例

・顔の大きい、ぶんぐりと背の低い、如何にも田舎々々した人で、染めたらしい髪の余りに黒^く々^々してゐるのも、よくなかった。(二六八頁上段二三)

右例で「余りに」は「黒々してゐる」を修飾していて「黒々してゐる」程度が度を越えすぎたものであるとの度外的極度であることを意味している。「黒々してゐる」の状態性は形容詞・形容動詞のそれに変わらない。次例も同類例である。

・余りに性格が異^なつてゐる(一二八頁下段一〇)・余りに変^へつて居る(一七四頁下段一九)・余りに慣^なれ^られてゐた(一六頁上段九)・余りに楽^が観^くしてゐた(三三頁下段二)

⑤その他 六例

次の二例は「余りに」が修飾する語句が形容詞・形容動詞の状態性と同様と言え、「余りに」はその状態性の程度が度外的極度であることを意味している。

・謙作は余りに社交馴れない自分が幾らか不安でもあつた。 (一五三頁下段三)

・自分の留守に三日も泊り、その上、自分の友達を呼んで夜明かしで花をしたといふのは余りに遠慮のない失敬な奴等だと思つた。 (二二三頁上段二〇)

次の一例は「余りに」が修飾する「さう云ふ氣のされる」と云う作用の実現のありさまが度外的極度であることを「余りに」が意味している。

・こんなにして、二人が遠く別かれて了ひ、交渉がなくなつて了ふといふ事は矢張り結局二人は赤の他人であつたといふ——余りにさう云ふ氣のされる事で…… (二三八頁下段五)

次の二例は、「余りに」が修飾する「出ない・知らなかつた」の「出る・知る」ことの實現のなさの程度が度外的極度であることを「余りに」は意味している。

・こんな風に二人は其事はよく話し合つたが、然しお栄自身の方の事は何となく互いに口に出しにくかつた。そして余りにその出ない事が変になつて来た時に (二四六頁上段一七)

・彼は自分が余りにさういふ事を知らなかつた事を——知る機会がなかつた事を今更に心附いた。

(二五七頁上段二〇)

次の一例は度外的程度を示すとは言いにくい。

●そして余りに毒にも薬にもならない事を座を白けさせまいと努力しながら (二七頁上段一九)

「余りに」は「たいして」と云った意味とまずは言える。「あまりに毒にもなることがない」よりしての謂いである。「余りに」は「毒にも薬にもなる」作用の実現のありようが相当度であることを意味すると言えう。

「あまりに」は四十例中三十六例までが形容詞・形容動詞やそれらに相当の語句の状態の程度が度外的極度であること意味することに用いられている。

作用の実現のありさまが度外的極度であることを意味する例が一例、動作・作用の実現のなさの程度が度外的極度であることを意味する例が二例。打消しの助動詞「ない」との間接的な関わりにおいて作用の実現のありようの程度が相当度であることを意味するに至っている例が一例である。この最後の用法は次の「あまり」にあって一般的用法となる。

二 「あまり」について

五十七例みられ、一例を除いて「余り」と表記されている。

① 形容詞・形容動詞を修飾する場合 六例

●余り長くゐるので、茶店の主は茶と菓子を持つて来た。 (五七頁下段二五)

文脈よりして、「余り」は「長く」を修飾してその程度が度外的極度であることを意味している。

●心配しだせば其処まで用心しとく必要があるのかも知れないが、余り勝手だからね。(二〇八頁下段二二)
「余り」は「勝手だ」の程度が度外的極度であることを意味している。

他の四例はいずれも形容詞を修飾するものである。

・余り馴々しい(七二頁下段一七)・余り烈しく(二〇〇頁下段一四)・あまり甚い(二五八頁下段五)・余り虫がいい(一二三頁下段一七)

②状態副詞＋「した」を修飾する場合 一例

・彼は音楽の事では余り明瞭した事を云ひたくなかった。

(二〇一頁下段一四)

「余り」が修飾する「明瞭した」は「明瞭している」の意で、形容詞・形容動詞の状態的意味と変わらない。「明瞭する」は状態副詞と言っているいいものである。「余り」はその状態の程度が度外的極度であることを意味している。

③形容詞語幹＋「すぎる」を修飾する場合 一例

・仕事の収獲が余り少な過ぎます。

(九三頁下段八)

「余り」は「少な過ぎます」を修飾してその程度が度外的極度であることを意味している。

以上の八例は、形容詞・形容動詞やそれら相当の語の状態の程度が度外的極度を意味することに用いられている。八例は「あまり」全用例の一四%でしかなく、「あまりに」の九〇%(四十例中三十六例)と対照的な用いられ方をしている。

以下の四十九例は大きく二つの場合に分けられる。

(一) 動作の実現のありようの程度が度外的極度であることを意味するもの 二例

①動詞＋「ている」を修飾する場合 一例

・軍人が余り何時までも髭を愛玩してゐるのに

(二〇二頁下段九)

右例で「余り」は「愛玩してゐる」を修飾してその動作の実現のありようが度外的極度であることを意味している。「何時までも」はその証左でもある。

② 動詞を修飾する場合 一例

・余り赤児がもがくので、話に気を奪られてゐた女の人も、漸く気がついた。

(三九頁上段二三)

右例で「余り」は「もがく(苦しうに体を動かす)」動作の実現のありようが度外的極度であることを意味している。「話に気を奪られてゐた」気がついた」はその証左でもある。

(二) 現実の状態の程度や動作作用の実現のありようの程度が相当度であることを意味するもの 四十七例

a 現実の状態の程度が相当度であることを打消しを示す語の意味との関わりにおいて示すもの

① 形容詞連用形+打消しの助動詞(ない・てなかった)を修飾する場合 八例

・「其話は余り面白くないネ」と彼は云つた。

(三七頁下段二四)

右例で「余り」は「面白くない」を修飾して「面白い」程度がそれ程でない、つまり相当度のものであることを意味している。それは「余り」が「面白い」に係りその程度が度外的極度であることを意味するもののその全体が「ない」に係り打消されると「～でありすぎることがない」は「そこそこである」となる。「余り」は「余り面白く」として「ない」に係ることに於いて、「面白く(ある)」程度が相当度を意味するに至つたと言える。

次例も同類例である。

・お牧といふ余り美しくない女中がゐた(五九頁上段一三)・余り氣持ちよくなかつた(五〇頁上段五二)・余り出したくない(四四頁下段八)・余り若くない(二六五頁下段一二)・余り大きく考へまい(九三頁上段一)・余り永くは居られないよ(二四四頁下段九)・余り立入つて貰ひたくない(二三頁上段五)

②形容動詞＋「ない」を修飾する場合 四例

・小鼻の開いた、元氣のいい、然し余り上品でない、

(二五頁下段一二)

右例で「余り」は「上品でない」を修飾している。「余り上品でない」は「そこそこ上品である」を意味している、「上品である」程度が相当度であることを「余り」は意味している。

次例も同類である。

・余りよささうでなく(一一五頁下段一八)・余り上等でない(一二七下段三)・余り得意でもない(一八一頁上段一〇)

③状態の意味を示す語を修飾語としてもつ(自ら含む)体言＋「でない」を修飾する場合 四例

・桃山建築にあるやうな唐破風のついた黒塗金字の大きな位牌が算を乱してゐるのは余りいい氣持ではなかつた。

(二五八頁上段一〇)

右例で「余り」は「いい氣持ではなかつた」を修飾して「氣持のよさ」の程度がそこそこの相当度と云える程度であることを意味している。

次例も同類例である。

・余りいいものぢやないよ(一七四頁下段四)・余り売れつ児でもない(一八二頁下段一七)・余り鳥毛立てで

もないな(二五八頁下段九)

④体言＋形容詞「ない」を修飾する場合 三例

・花見小路の茶屋は新建ちの余り気分のない家だった。

(二八四頁下段一九)

右例で「余り」は「気分のない」を修飾して「気分のある」程度がそこその相当度であることを意味している。

次の二例も同類例である。

・余り興味はないらしいかった(二三頁上段一七)・余り変りなかつた(八一頁上段一六)

⑤その他 四例

次の四例も以上の場合と同類例(同様の意味の例)と言える。

・且つ賢い女なら兎に角、人がいいだけで、そんな事には余り頼りにならないのを彼は齒がゆく思った。

(二五一頁上段二三)

・余り感心出来ない事

(一一八頁上段六)

・余りよく見る事が出来なかつた

(二二一頁上段一八)

・余り似てない

(二四六頁上段二三)

b 動作作用の実現のありようの程度が低度であることを打消しの意味を示す語との関わりにおいて示すものの

①動詞＋助動詞「ない(てない・なかつた)」を修飾する場合 二十六例(際だって多い)

・お栄さんも余り心配しないやう願ひます。

(九三頁下段一四)

「余り」は「心配する」と云う心情行為の実現のありようの程度が低度であることを「ない」と係り合うことで意味している。

次例も同類である。

・余り心配しないで(九二頁下段二三)・余り云ひたがらない(一三七頁下段一一)・余り拘泥せずに(一四四頁上段二三)・余り拘泥しない(一五六頁下段一〇・一二七頁上段三)・余り賛成してない(一二五頁下段二〇)・余り此方に頼らずに(一二三頁下段一二)・余り責めないで呉れ(九七頁上段八)・余り大きく考へまい(九三頁上段一)

「余り」が修飾する語句は心情行為を示すものであることが注目される。

②形容詞＋(氣持・氣・感じ・感心)＋動詞(し)＋ない(しなかった)を修飾する場合 七例

・彼は信行に対しても余りいい感じがしなかった。

(九九頁下段六)

・謙作は妙に羞かしくなり、同時に余りいい氣持もしなかった。

(三九頁下段一八)

「余り」が直接修飾している「いい感じがし(する)・いい氣持もし(する)」は自らなる作用を示す。「余り」はその心情作用の実現のありようの程度が度外的極度であることを意味するものの、それを「ない」が否定していることでそれらの心情作用の実現のありようの程度が低度であることを示すに至っている。

同類例に次のものがみられる。

・余りいい氣がしなかった(一三八頁下段一・一一五頁下段五・一五二頁下段二)・余り感心しない(一四〇頁下

段一)・余り賢い感じがしない(二四八頁下段一六)

①の諸例が心情行為(意志的)の実現のありようであるに對し、②の諸例は心情作用(無意志的)の実現のありようの程度を量るものであることが注目される。

c 動作の実現の頻度や量の少なさを意味するもの

②量の少なさを意味するもの

①動詞十「なかった」

・腹が空いてゐるつもりだったが、彼は余り食へなかつた。

(九五頁下段二三)

・酒は誰れも余り飲まなかつた。

(一五四頁上段一)

右例で「食へる・飲む」と云う動作の実現のありようは量の点において低度に了ったことを「余り」は「なかつた」の意味に関することに示している。

③頻度の少なさを意味するもの

①動詞十「なかった・ない」

・お鈴は階下の掛りで余り出て来なかつた。

(五九頁上段一一)

・余り口を利かなかつた。

(四三頁上段二四)

右例で「余り」は、「出て来る・利く」をまずは修飾しその全体が「なかつた」に係っていくことで「出て来る・利く」の実現のありようがその頻度の点で低度であることを示している。「利く」にあつては量の少なさを含むと言えよう。

次例は右の二例と同類例である。

●余りそれが出ないので(一六六頁上段一三) ●かういふ家を余り見た事のない(一一五頁下段二〇) ●……を見る事はその後、余りなかつた(二六八頁下段九)

「余り」の諸例の意味用法は以上のようなものである。

「余りに」が専ら状態の程度が度外的極度を意味するのに対して、「余り」はその意味に用いられることは少なく、多くは打消・非存在の意味を示す「ない」と関わって状態の程度や動作作用の実現のありようの程度が低度であることを意味するのに用いられている。その程度も動作作用が含みもつ状態にとどまらず、量の少なさや頻度の低度の実現を意味するに至っている。実現のありようの程度を意味する場合は多様である。

三 「あんまり」について

九例みられる。「余りに・余り」と比べて用例数が少ない。九例中八例までが会話文に他の一例は女性の手紙文に用いられている。口語性の強い語と言えよう。文学作品での使用例の少ない因でもある。

①形容詞・形容動詞語幹を修飾する場合 四例

●「……。あんまり淋しいやうだつたら、その時勝手に一人出かけるわ」 (二〇七頁上段八)

●「貴方があんまり執拗いやうな気がして」 (二三四頁下段三)

右例で「あんまり」は「淋しい・執拗い」を修飾していて「淋しい・執拗い」なる状態の程度が度外的極度であることを意味している。次例も同類例である。

●あんまり想ひがけないのと(一六七頁下段八) ●「……御主人の留守に来て、幾ら親類だつて、あんまり

失礼^ね」(二六頁下段二)

②動詞＋「ている」を修飾する場合 一例

・「……泥棒だなど思ひながら、あんまり疲^{れて}居^るんで、……」

(二八九頁上段一五)

右例で「あんまり」は「疲れて居る」を修飾している。「疲れている」は体の状態を意味していて、その状態性は形容詞・形容動詞のそれと変えることはない。「あんまり」は「疲れて居る」の状態の程度が度外的極度であることを意味している。

③状態を示す語＋動詞「なる」を修飾する場合 二例

・「……。あんまり淋^{しく}な^つたら家をたたんで出かけますよ」

(六五頁下段二)

・「……。ようござんすか。……余^{あんま}りお勝^ちにな^るんですもの。……」

(四五頁上段一三)

右例で「あんまり」は「淋しくなつたら・お勝ちになる」を修飾し、「淋しくなる・お勝ちになる」と云う作用の実現のありよう(淋しく・お勝ちに)の程度が度を超えて極度であるありようで実現している(ゝなる)ことを意味している。

④動詞＋受身の助動詞を修飾する場合 一例

・「さうあんまり問^ひつめ^られ^ると困^るが……」

(六五頁上段一)

右例で「あんまり」は「問ひつめられる」を修飾し、「問ひつめられる」と云う受身の動作のありよう(問ひつめられたりよう)の程度が度を超えて極度であることとして受身の動作が実現していることを意味している。

⑤形容動詞連用形＋動詞「なる」＋打消しの助動詞「ない」を修飾する場合 一例

・「……、僕の方はどうでもいいから、あんまり露骨にならないやうに御願ひします」 (六六頁下段三)

右例で「あんまり」は「露骨になる」ことが度を超えて極度であることを意味するもののその全体が「ない」に係り否定されることで「露骨になる」作用の実現のありようが低度で実現していることを示している。

「あんまり」は全例九例中①②の五例がいわゆる程度副詞として用いられていて、残る四例は動作作用の実現の程度を示すものであり、「余り」・「余りに」の中間的な用いられ方をしている。口語性の強さは他の二例と異にする。

(2) 極度であることを示すもの

一 「極端に」について 二例

① 形容詞を修飾する場合 二例

・今の謙作は阪口に対しては極端に邪推深くなつてゐた。 (二三頁下段三)

・其所まで予期出来なかつたのは米の質が極端に悪い事だつた。 (二四七頁上段五)

右例で「極端に」は「邪推深く・悪い」を修飾しそれらの状態の程度が極度であることを意味している。

極度を意味する語は右の一語であり、モノゴトの状態の程度が極度であることを意味することには用いられていない。

(3) 度外的高度であることを示すもの

一 「如何に」について 十三例

① 形容詞を修飾する場合 六例

- 自分達は誰にも知られずに一生を終つて了ふ。如何にいいか——。(二二六頁下段七)
- 右例で「如何に」は形容詞「いい」を修飾しその全体は詠嘆を示す「か」で結ばれている。「如何に」は「どのように」とも云える意味で「いい」と云う形容詞の示す状態の程度が量り難いまでの高度であることを意味している。その量り難いとする疑問をこめた詠嘆の意は文末の詠嘆を示す「か」に係り結ばれている。

次例も同類例である。

- それ等の絵の価値を如何に自分が低く見てゐるかを見せようとする。(二二三頁下段二)
 - さう云ふ事が如何に恐ろしい罪であるか、…(中略)…か、そんな事を諄諄と説き聴かす真面目臭い青年になつてゐた。(六二二頁上段八)
 - それが現在の彼には如何によかつたか。そして如何によき逃場であつたか。(二二九頁下段五)
 - 浄化された其恋は如何に氣高い騎士を更に氣高くし、(二二二頁下段二六)
- ② 形容動詞を修飾する場合 四例
- 「……。これには如何に強情な爺も恐れ入つたさうだ。……」(二四二頁上段一一)

右例で「如何に」は「強情な」を修飾してその状態の程度が「どんなにか(量り知れない程)」と云った意味で度外的高度であることを示している。

次例も同類例である。

●如何に此世が楽になる事か(一二三頁下段二四) ●如何に安な事か(一二六頁上段三二) ●如何に超然たる竹さん(二五七頁上段二二)

③動詞＋「ている」を修飾する場合 一例

●末松の今の気分と自分の気分とが如何に離れて居るかが顧られ、 (二五七頁上段二二)

右例で「如何に」は「離れて居る」を修飾している。「離れて居る」は「離れた状態にある」の意で、形容詞・形容動詞の状態の意味と変らない。「如何に」はその状態の程度が量り難いまでのものである、つまりは度外的高度であることを示している。

④動詞又は動詞＋「た」を修飾する場合 二例

●その為如何に二人の運命が狂ひ出すか、 (六二頁上段九)

右例で「如何に」は、「狂ひ出す」を修飾し、その作用の実現のありようが「どんなにか(量り知れない程)」と云った意味で、その程度が量り難い(度外的)高度であることを意味している。

次例も同類例と言える。

●……といふより寧ろ過失と云ひたいやうなものが如何に人々に祟つたか、 (二五七頁下段二)
いわゆる程度副詞と云えるものは①～③の場合のもので十三例中十一例と八四・六%を占める。

尚、「如何にも」はいわゆる程度副詞とはいいい難く稿を別にする。

(4) 高度であることを示すもの

一 「大変」について 三十六例

① 形容詞を修飾する場合 十八例

・「どうしたんだい。大変気六ヶしいんだネ。酒はいやかい？」

(五九頁上段四)

・そして彼は其人の其動作を大変よく思ひ、いい感じで、

(二三頁下段二二)

右例で「大変」は「気六ヶしい・よく」を修飾し、その状態の程度が高度であることを意味している。

次例も同類例である。

・大変感じのいい評(一九九頁下段八)・大変親しい感じを(二五五頁上段二)・大変美しい物(一九四頁上段一)

七)・大変烈しく(二三頁下段八)

② 形容動詞を修飾する場合 八例

・「此処の連中は皆、大変元気だネ。……」

(四〇頁下段三二)

・「大変立派な家へ来たやうな気がする」

(二〇四頁下段一九)

右例で「大変」は「元気だ・立派な」を修飾し、その状態の程度が高度であることを意味している。

次例も同類例である。

・大變適切に(一一三頁上段九)・大變幸だ(二〇〇頁上段九)・大變寛大なんですけれど(二三四頁下段二)・大變好都合な部屋(二五六頁上段一六)

③動詞＋「ている」を修飾する場合 二例

・大變御無沙汰してゐます。

(八八頁上段一八)

・「その竹さんですが……殺した奴が覗ひはしないかと皆大變心配してゐるさうですわ」(二六〇頁下段七)

右例で「大變」は「御無沙汰してゐます・心配してゐる」を修飾している。それらはいずれもヒトのありさま状態を意味している。「大變」はその状態の程度が高度であることを意味している。

④動詞＋「ていた」を修飾する場合 三例

・「お前の方の事をお栄さんに話したら大變喜んでゐられたよ。……」

(一四〇上段三)

三例ともに「喜んでいた」を「大變」が修飾している。「喜んでゐる」は「心配している」とその状態性において変りない。「心配した・喜んで」状態にあるのである。「大變」は「喜んでゐられた」の状態の程度が高度であることを意味している。

他の二例は次のようである。

・「大變喜んで居たよ」(二六五頁下段三)・「大變喜んでらしたやうよ」(一七四頁上段一二)

⑤動詞を修飾する場合 一例

・「……。大變御厄介をかけ、申訳ありません」

(二三三頁下段八)

右例で「大變」は「御厄介をかけ」を修飾している。「御厄介をかけ」は話手が対者に動作をさせている。

その動作がそれが含みもつありようの程度が高度の程度において実現していることを「大変」は意味している。いわゆる程度副詞とは言えない。

⑥ 動詞＋「た」を修飾する場合 二例

・「……？貴方は前と大変変つたやうに思ふけど……」 (三二頁下段六)

・「大変御面倒をかけました」謙作は頭を下げた。 (三三頁上段二二)

右例で「大変」は「変つた・御面倒をかけました」を修飾している。これらの被修飾語句に対する「大変」の意味のありようは⑤の場合と変らない。動作作用が高度の程度において実現していることを意味している場合である。

⑦ 動詞＋受身の助動詞＋「た」を修飾する場合 一例

・「……。此間の話をしたら、大変讃められたよ」と云った。 (四七頁下段九)

右例で「大変」は「讃められた」を修飾している。「讃められた」は「よく言われた」とも言えるもので、「言われた」と云う動作が含みもつ「よく」の程度が高度であることにおいて動作が実現したことを「大変」は意味している。⑤・⑥と同様の意味である。

「大変」が用いられている諸類例は以上がその全てである。いわゆる程度副詞と言えるものは①～④までで三十一例を数える。全例三十六例の八六・一％を占める。残る五例は動作作用の実現のありようの程度を高度と量るものである。

二 「非常に」について 三十二例

「大変」とほぼ同数と言える。

①形容詞を修飾する場合 十六例

・然し湯上りに濃い化粧などすると、私の眼にはそれが非常に美しく見えた。

(八頁下段一)

・「……。そうだと僕には非常にいいんです。

(二四六頁下段七)

右例で「非常に」は「美しく・いい」を修飾し、それらの状態の程度が高度であることを意味している。

次例も同類例である。

・非常に心苦しい(八九頁下段八)・非常にこわいのだ(八九頁下段八)・非常に弱いのだ(一一〇頁上段二)

・非常に早かった(二六三頁下段三)

②形容動詞を修飾する場合 十三例

・彼は今、自分が非常に大きなものに包まれてゐる事を感じた。

(七一頁上段一一)

・それは気六ヶしさうな、非常に憂鬱な顔だった。

(一一八頁上段二四)

右例で「非常に」は「大きな・憂鬱な」を修飾し、それらの状態の程度が高度であることを意味している。

次例も同類例である。

・非常に不愉快だった(六一頁上段二〇)・非常に静かで(二一一頁下段二)・非常に気が楽だよ(三三六頁上段

五)・非常に好都合なのだ(二五六頁上段四)

③動詞＋「た」を修飾する場合 三例

・総じて彼がかういふものに触れる場合彼の気分の状態が非常に影響した。

(一三三頁下段四)

・父上は非常に怒られた。

(八九頁下二二)

右例で「非常に」は「影響した・怒られた」を修飾している。「非常に」はそれらの作用動作が作用動作のありようの程度が高度であることにおいて実現していることを意味している。このような「非常に」の意味の用例は三例しかなく、全体の九・四％にすぎない。

「非常に」は殆んどが形容詞・形容動詞で示される状態の程度が高度であることを意味するのに用いられている。それは「大変」よりさらに徹底している。

尚、「非常に」は「非常な」として、状態の意味をもつ体言を修飾してその状態の程度が高度であることを意味する例が七例次のようにみられる。「大変」には全くみられなかった用法である。

・それは非常な幸福に違ひなかつた。

(三九頁下段二二)

・剣山の後ろから非常な美しい曙光の昇るのを見た。

(四三頁下段一一)

・非常な相違

(一三三頁下段六)

・非常な勢ひ

(一九〇頁下段一六・一九一頁下段五)

・非常な苦痛

(二〇五頁上段三)

・非常な努力

(二五六頁下段一)

三 「ひどく」について 二十九例

①形容詞を修飾する場合 九例

・「ひどく品の悪い商売ぢやないか」

(一四〇頁下段一〇)

・甚く優しいだけ只事でない事が知れた。

(六頁下段一一)

右例で「ひどく」は「悪い・優しい」を修飾し、それらの状態の程度が高度であることを意味している。

次例も同類例である。

・甚く醜く(一七頁下段二三)・甚くきたない(八四頁上段七)・甚く弱々しい(二三八頁上段二三)・甚く可笑

しかった(二三五頁上段二三)・ひどく苦しかった(一四四頁下段四)・甚く彼には面白かった(一五〇頁下段八)

・甚く頼りない(一三三頁下段二二)

② 形容動詞を修飾する場合 六例

・S氏も石本に対すると謙作に対すると調子を変へるわけに行かず、甚く叮嚀であった。

(一四五頁上段二二)

・染めたのか、くすぶったのか、兎に角、黒ずんだ、ひどく古風な座敷へ通された。(一五五頁下段一八)

右例で「ひどく」は「叮嚀で・古風な」を修飾し、それらの状態の程度が高度であることを意味している。

次例も同類例である。

・甚く億劫に(一〇一頁上段二三)・甚く感傷的な(一八二頁上段一〇)・甚く不愉快な(二二七頁下段一五)・甚

く空虚な(二三五頁上段三)

③ 動詞+「ている」を修飾する場合 二例

・それでも部屋の中は甚く蒸々してゐる。

(一二三頁下段二二)

・「……。今日の奴は河合をなぐります、とかひどく憤慨してゐるんだが、……」

(六七頁下段二〇)

右例で「ひどく」は「蒸々してゐる・憤慨してゐる」を修飾している。「蒸々してゐる・憤慨してゐる」は、「部屋の中・河合」の状態・心情を示している。共に形容詞・形容動詞の状態と変らぬ状態性を意味している。「ひどく」はそれらの状態の程度が高度であることを意味している。

④ 動詞＋「ていた」を修飾する場合 四例

・此人が、自身に子のない所から直子を甚く可愛がつてゐた。

(二七二頁上段九)

・要は肩や首の烈しい凝りで、甚く苦しがつて居た。

(二二〇頁下段二六)

右例で「ひどく」は「可愛がつてゐた・苦しがつて居た」を修飾している。「可愛がつてゐた・苦しがつて居た」は、「可愛がる・苦しがる」と云う動作作用を示す語が「てい(る)」と云う動作作用の継続を意味する語句に続くことで全体が状态的意味化している。「ひどく」はそれらの状態の程度が高度であることを意味している。

次例も同類例である。

・甚く荒れはててゐた(二四五頁下段一〇)・甚く興奮してゐた(一五一頁下段二四)

⑤ 動詞を修飾する場合 二例

・信行は此日可成り甚く酔ひ、一人で騒いでゐた。

(二七一頁下段一八)

・手足の先が甚く冷え、心臓の衰弱から、脈が分らない位になつてゐた。

(二六五頁下段一四)

右例で「ひどく」は「酔ひ・冷え」と云う作用を示す動詞を修飾している。「ひどく」はそれらの作用が作用のもつたありようが高度の程度において実現していることを意味している。

⑥動詞＋「た」を修飾する場合 三例

●それよりも今日阪口に会ふと云ふ事が未だはつきりしない彼の頭では甚くこんぐらかった問題であつた。

(二〇頁下段八)

右例で「ひどく」は「こんぐらかった」を修飾し、その状態の程度が高度であることを意味している。「こんぐらかった」は「問題」の性質を説明しており、その意味性は形容詞・形容動詞の状態と変りない。

次の二例は右と同様は言えない。

(二〇六頁下段一)

●これから新しい生活に踏出さうと云ふ矢先だけに此事は甚くこたへた。

(二一八頁下段一三)

●其処には先刻甚く喜んだ壺や函がある。

右例で「ひどく」は「こたへた・喜んだ」と云う作用を修飾している。「ひどく」はそれらの作用が作用がもつありようの程度が高度であることにおいて表現していることを意味している。

⑦動詞＋「れ(受身)」＋「た」を修飾する場合 二例

●矢張り支那人の描いた鷹と金鶏鳥の大きな双幅の花鳥図などに彼は甚く惹きつけられた。

(一一三頁上段二四)

●その内、不図その木の肌を気味悪く思ひ出すと、彼の弱つた神経は、それから甚く劫かされた。

(八四頁下段一八)

右例での「ひどく」は「惹きつけられた・劫かされた」を修飾している。「ひどく」は「惹きつけられる・劫かされる」と云う作用がそれらの作用がもつありようの程度が高度であることにおいて表現していることを

意味している。助動詞「た」の存続・完了の意味の相異に依るものである。

⑧ 動詞＋「してしまった」を修飾する場合 一例

・「心臓が甚く衰弱してつたので、

(二六七頁下段一)

右例で「ひどく」は「衰弱してつた」を修飾している。「てつた」は「衰弱する」と云う作用の完了を意味している。⑦の後の二例の場合と同様の意味のありようである。「ひどく」は「衰弱する」と云う作用がもつ状態の程度が高度であることに於いて実現していることを意味している。

「甚く」が状態の程度が高度であることを意味する場合は①～④と⑥の二例で、二十三例となり、全体(二十九例)の七九・三%を占める「大変・非常に」に比べると一〇%ばかり落ちる。形容詞・形容動詞を修飾してその状態が高度であることを意味する例は十五例で、全体の五三・六%で、これ又「大変・非常に」に比べるとかなり低い。いわゆる程度副詞としての熟成度の違いによると言えようか。

尚、形容詞としての「ひどい」は、大変よくない・むごいと云った意味で用いられることが殆んどである。

・「まあ、ひどいわ。こんなに御馳走を持つて来て上げたのに……」

(二六六頁上段五)

・誰れの眼にも借り着といふ事は直ぐ分かる。ひどい恰好をしてゐるのである。

(二五一頁上段三)

・彼自身見ても何所に希望を繫いでいいか、分らない程ひどい様子を見ると

(二〇四頁下段二四)

形容詞「はなはだしい」と言える、そのありさまが良い意味、悪い意味を問わず、「その程度が高度であるありさま」であることを意味している例は次の一例にとどまった。

・それで京城までが甚く大旅行のやう思はれ、億劫だった。

(二〇七頁上段一三)

程度副詞としての「ひどく」はここからであろう。

四 「随分」について 二十二例

①形容詞を修飾する場合 十例

・「さうね、——随分黒いわネ」

(二八頁上段五)

・それは幅は狭いが随分長い石段だった

(七三頁下段二四)

右例で「随分」は「黒い・長い」を修飾し、それらの状態の程度が高度であることを意味している。

次例も同類例である(会話文での使用には○印、手紙文でのそれには△印を付す)。

・随分[△]恐[△]しい事(九二頁下段一四)・随分[△]つらいらしく(九八頁上段七)・随分[△]強[△]く(九八頁下段一九)・随分[○]久[○]しい事(一一〇頁上段二三)・随分[○]淋[○]しくなるね(八五頁下段二)・随分[△]会[△]ひたくなる(九三頁下段五)

二例を除けば会話文か手紙文において用いられている。

②形容動詞を修飾する場合 三例

・「随分真剣なんだね」

(一三四頁下段一三)

・「随分無理な御注文ね」と云った。

(一九九頁下段九)

・「随分危険な容態なので△いませうか？」

(二六六頁下段四)

右例で「随分」は「真剣な・無理な・危険な」を修飾し、それぞれの状態の程度が高度であることを意味している。三例共に会話文で使用されている。

②動詞を修飾する場合 五例

・「放蕩などから父にも義母にも随分心配をかけながら……」
(六七頁上段一八)

△
・……と聴いた時、随分驚きもし、暗い気持にもなった。
(九〇頁上段六)

・自暴自棄を起すお前でない事は信じてゐるが、随分参る事と思ふ。
(九一頁下段二二)

△
・随分喜ぶ事と
(九一頁下段二六)

○
・落胆も随分する
(二四〇頁上段一七)

右例五例(○印は会話文、△印は手紙文)において「随分」は「心配をかける・驚きもし・参る・喜ぶ・落胆もする」を修飾している。いずれも心情作用を示すものである。「随分」はその心情作用が心情のありようの程度が高度であることにおいて実現する(した)ことを意味している。

いずれも会話文か手紙文での使用である。

④動詞＋「た」を修飾する場合 四例

・さう云ふ衝動で随分苦んだ事から、
(八七頁下段二四)

・そしてそれを聴いた時彼は随分笑つたものの、
(一三六頁下段七)

右例で「随分」は「苦んだ・笑つた」を修飾し、その動作作用がそれらの動作作用がもつ状態の程度が高度であることにおいて実現したことを意味している。二例ともに地の文での使用である。

△
・一時は随分まゐりましたし、
(九二頁下段二三)

・「……此方でも随分好意を持つた」
(一五七頁下段九)

右例で「随分」は「まゐりました・好意を持つた」を修飾している。「まゐりました・好意を持つた」は

「まるった・好意を持った」心情作用の作用の当の時点での持続であり、持続は状態と言える。「随分」はそれらの状態の程度が高度であることを意味している。手紙文と会話文での使用である。

⑤動詞＋「ていた」を修飾する場合 一例

- 「君に随分好意を持てゐたさうだ」

(二五七頁下段八)

右例で「随分」は「好意を持てゐた」を修飾している。「好意を持てゐた」は「好ましく思っていた」と云った意であり、「好ましく思う」心情作用の持続したありさまであって、状態と言える。「随分」はその状態の程度が高度であることを意味している。

「随分」は以上のようにして、二二二例中十六例(七二・七%)が状態の程度が高度であることを意味する程度副詞として用いられ、残りの六例が動作作用の実現の程度を量るものとして用いられている。会話文・手紙文での使用が九〇・六%を占めるのも大きな特徴である。

尚、唯一例であるが、「の」を介して状態的意味を含む体言を修飾し、その状態の程度が高度であることを意味する例がみられる。

- 随分の長道中だった。

(二九頁上段二三)

「非常に」かなりよくみられた用法である。

五 「とても」について 二十例

①形容詞を修飾する場合 二例

- 然し医者達も迎も六ヶしい事を明瞭に云つてゐ、

(二〇四頁下段一四)

・「実は昨日の御様子では迎も六ヶしいと思つたので……」

(二〇四頁下段一四)

右例で「迎も」は「六ヶしい」を修飾し、その状態の程度が高度であることを意味している。僅か二例の使用例数と共に「六ヶしい」と云う話の修飾に限られていることに注目しておきたい。

② 形容動詞を修飾する場合 三例

・それでも何か知らぬ不安が迎も六ヶしさうに私語り事もあつた。

(三一頁上段一三)

・これは迎も今話した所で駄目だと思つた。

(九六頁下段二四)

・「……。君一人では迎も駄目だらう?」

(一五七頁下段二二)

右例で「迎も」は「六ヶしさうに・駄目だ・駄目だらう」を修飾し、それぞれの状態の程度が高度であることを意味している。ここでも「迎も」は「六ヶしさうに・駄目だ」と云う語の修飾に限られている。「とても」二十例からすると以上の意味用法の例は二五%にとどまり、残る七五%の例は以下のように打消しの語を伴う語句の修飾に用いられている。「とても」の原義「とてもかくても」の意味よりしての「どうにしても」と云った意味が未だ払拭しきれずにあるのであろう。

③ 動詞+「ない」を修飾する場合 六例

・「Oさんのおあひは迎も出来ませんわ」

(四二頁上段一〇)

・「……。もう一軒は周囲が狭苦しくつて迎も入る氣のしない家だつた。……」

(一一六頁上段二)

右例で「迎も」は「出来ません・入る氣のしない」を修飾している。「おあひは出来る」は話手の「(おはひ)する」動作の実現の可能性を意味している。「(おはひは出来ません)」は「せん」と打消すことで「(おあひ

する」可能性がないことを意味しているのであるが、「迎も」が修飾することにおいて「(おあひする)ことの実現の可能性の程度が全き零度であることを意味している。「入る気のしない」を修飾する「迎も」も「入る気がする」心情作用の実現の可能性の程度が全き零度であることを意味していると言えよう。

残る四例も同様に説明できる。

・迎も人頼りの結婚など思ひもよらないと云ふやうな事を話した。(二二頁下段一九)

・「……。こりやあ、迎も金紙までは持たないわ」(二八頁下段一八)

・「……。人生五十年やるなんて、迎もかなはないから、私、途中で御免蒙ったわ」(二六頁上段九)

・「話した。迎も承知しまいと思つたが……」(一一〇頁下段一八)

「迎も」は「思ひよる・持つ・かなう・承知する」と云う動作作用の実現の可能性の程度が全き零度であることを意味している。

④動詞＋「なかった」を修飾する場合 二例

・それより陰気臭くて迎も住む氣になれなかつた。(七四頁下段一五)

・それを見ると、これが助かるとは迎も思へなかつた。(二〇四頁上段二二)

右例で「迎も」は「住む氣になれる・思へる」を修飾し、それらの心情作用の実現の可能性の程度が全き零度であることを意味している。

⑤動詞＋可能の助動詞＋打消しの助動詞「ない」を修飾する場合 四例

・それでも一人では迎も上げられず、(一九〇頁下段一八)

・「……ど、現在さういふ事がある人とは迎も考へられませんかね。……」

(二五〇頁下段一九)

右例で「迎も」は「上げられず・考へられません」を修飾し、「上げる・考へる」と云う動作の実現の可能性の程度が全き零度であることを意味している。

次例も同類例である。

・「迎も見られさうもない(八二頁上段五)・迎も覚えられない」(二二七頁上段二一)

一例だけだが、動詞＋「はずがない」を修飾している場合がある。

・迎も承知する筈のない父上との衝突

(八二頁上段五)

最後一例、

・「ほうとてもとても」

(二五八頁下段六)

なる例がある。前後の文脈よりすると「そこはとてもとても人の住めるところでありませんわ」と云った意味で、「住む」と云う動作の実現の可能性の程度が全き零度であることを「とてもとても」は意味している。この場合の用例である。

六 「至極」について 十例

①形容詞を修飾する場合 ナシ

②形容動詞を修飾する場合 九例

・そして至極軽快な首の動きで、

(三九頁上段二四)

・青年は至極穏やかな顔をしてゐた。

(五七上段二〇)

右例で「至極」は「軽快な・穏やかな」を修飾し、それぞれの状態の程度が高度であることを意味している。次例も同類例である。

●至極流暢な発音で(八五頁上段一四) ●至極単調な踊りを至極虚心に踊る(一五六頁上段七・八) ●至極気持が自由だったし(一六九頁下段二三) ●至極質素な身なり(一七三頁下段四) ●至極なだらかに(一八五頁下段二

一) ●至極無事に(一九五頁上段八)

九例中七例まで漢語を修飾していることが注目される。

②状態副詞＋「していた」を修飾する場合 一例

●愛子からすれば、子供からの関係上、謙作にはさういふ感情で至極、あつさりして居られたからでもあつたらう。

(三二頁上段九)

右例で「至極」は「あつさりして居られた」を修飾し、その状態の程度が高度であることを意味している。

「至極」の用例は以上が全てである。ヒト・モノの現実の状態の程度が高度であることを意味するものばかりである。「至極」が漢語であることからか、漢語を修飾する傾向が強い。形容詞を修飾する例がみられないのもそのことによるかと思われる。

(続く)